

# サマンバヤ通信

サマンバヤの会 THE GROUP OF SAMANWAY

インドの子どものための教育のために  
for Education to Every Child

## CONTENTS

第15回ナマステ・インディア2007  
に参加します/ニュース・プリテン  
NO.65/舌で感じるインド/マザ  
ー・テレサ没後10年写真展/イン  
ドで話そう/舌で感じるインド  
/2006年度インド隊レポート/イン  
ド全州の旅/大橋正明講義録第3  
回



(カイラーシュ氏主宰の青空学級 2006年3月)

## 日印交流年公式祭事 “第15回ナマステ・インディア2007”に参加します。

期日：2007年9月29、30日(土、日) 午前10:00～午後8:00

会場：東京都代々木公園イベント広場、野外ステージ

今年は日印交流年ということで、標記の記念イベントに参加することにしました。当会としては活動内容を紹介するとともに、当会の活動に賛同していただける里親や会員の獲得、あるいはボランティア会員の獲得を目指したいと思っています。この手のイベントには過度な期待をもたずに、当会の会員同士が集う機会としてとらえ、ほかの団体の活動などに刺激を受けつつ、活動を活性化させたいと考えています。当日はインドの関係者が数多く集まるとおられますので、是非、お越しく下さい。

詳細が決定しましたらサマンバヤの会のホームページ (<http://www.questions.gr.jp/samanway/>) と、現在、少しずつ書き込んでいるブログ (<http://www.ratio.co.jp/blog/samanway/>) などでご案内いたします。

## ニュース・ブリテン NO.65

アヒンサー（非暴力）の理想は、政治・経済の小手先の変化で達成しえるものではありません。私たち人間が深く内面を見つめ、環境や他者、自分自身と向き合う時の姿勢を、根幹から変えていかねばなりません。私たちには単純ながら愛に満ちた継続可能な生活と、すべての者に対する敬意の念が必要です。

今日、人類はひどく暴力に苦しんでいます。世界における暴力の問題を解決するには、人間の心を進化させねばなりません。過去2年間、私はそのことについてずっと考えてきました。そのためニュース・ブリテンをお送りできなかったのです。

実際、この周辺地区における暴力と闘っている人たちから、好意的な反応も見られます。ですが、彼らは消極的な共感しか向けてくれません。私は積極的な共感を生み出す方法を探っています。物事を正しく考えるにあたって、私たちは「優しく、より優しく、もっとも優しい方法」を活用すべきだとヴィノバ翁は言いました。これは、魂の力を進化させることによって実現されるでしょう。

現在、2つの寄宿制学校に95人の児童がいて、幼稚園に60人の幼児が来ています。このプログラムは順調に進んでいます。ラルガンジ（Lalgañj）の村には、ツリー・ワールドを通して作った学校が1つあります。こちらのほうの進展は、あまり満足できるものではありませんが、プログラムを発展させていけるように努力しています。45の村々に1,200名の生徒がいます。このプログラムも進展中です。

3つの村で灌漑プロジェクトを開始しました。このプログラムはラクナウ（訳注：ウッタルプラデシュ州の州都）のサキ・ババ・ニデ（Sakhi Baba Nidhe）が資金を提供してくれています。

今年のフリー・アイ・オペレーション・キャンプでは、27,143件の手術が行われました。これには169人の生まれつき目が不自由だった子どもも含まれていません。費用は2千万ルピー（約6千万円）以上かかりました。これは、グジャラート州のバンサリ財団（Bhansali Trust）の援助を得て行っている、素晴らしいサービスです。地元の病院でこの手術を受けたとして換算すると、本来なら2億3千万ルピー（約7億円）に相当するお金が必要となる大事業です。キャン

プは100%成功をおさめていると言えます。

海外から大勢の若者がアシュラムを訪れ、数週間の滞在を通して、勉強したり、教育活動を助けてくれたりしています。

過去2年間、モンスーンによる雨は農作物には足らず、不作でした。

インド国内や海外の支持者から、協力を得られていることを嬉しく思っています。

ドワルコ・スンドラニ

訳：原口真由美

## マザー・テレサ没後10年写真展に訪れて

賛助会員 村田尚子（MURATA Takako）

先日、2歳の息子を連れて上智大学で開催されている、写真家沖守弘さんの「マザー・テレサ没後10年写真展」に出かけてきました。

偶然、新聞で見かけた記事。「祈り 今こそ」という大きな文字が飛びこんできました。家から上智大学までは、子どもを連れて行くには近い距離ではないのですが、なぜか「今、行かなければ！」という思いから、気がつけば東海道線の満員電車の中。息子はすれ違う珍しい電車に喜んでいましたが、私は着いた時にはぐったり。それでも、会場に入ると疲れも吹き飛ばすような、マザー・テレサのメッセージが書かれた写真の数々。涙が出そうになりました。お客さんも遠いところからたくさん来ていました。

私が初めて、マザー・テレサを知ったのが、高校生の時。スタディーツアーで訪れたバングラディッシュで、マザー・テレサがつくった孤児院に行く機会に恵まれました。それまで、マザー・テレサの名前は聞いたことあったのですが、何をした人かは詳しく知りませんでした。その後、日本に帰って高校の図書館で借りたマザー・テレサの本が、沖さんが書いたものでした。大学に入り、初めての春休み、大学の先輩に連れられて初めてのインド。1週間カルカッタに滞在し、マザーハウスでボランティアができたのはとても貴重な体験でした。その際に参加した朝のミサで、マザー・テレサの姿を見ることができ、メダイ（マリアさまの絵の描かれたペンダントのようなもの）を直接いただくことができたのは私の一生の宝物です。

写真展の会場では幸運にも沖さんにもお会いでき、

いろいろマザー・テレサや、インドのお話を聞くことができました。(サインもいただきました!)会場では「なぜ、世界で唯一密着取材できたのですか」と、いろんな方から質問されていました。沖さんがマザーに撮影を許可された頃はまだマザーがノーベル平和賞をとる前で有名でなかったそうです。撮り続けて5年過ぎた頃、インド政府がインドの貧困が世界に知られることを好ましく思っていないことを知り撮影を打ち切ったそうです。しかし、結果的に5年間も長期で取材できたのが、沖さんだけということでした。その後、マザーが有名になって、他の写真家が取材したいと思った時には、もう許可が下りなくなったということでしょうか。

しかし、その後マザーから「私の名誉のためではなく、このような世界があることを皆さんに伝えるため、今まで撮った写真を発表してください」と言われたそうです。



マザー・テレサ ゲルニカの前で

\* 作品はピカソの有名な絵画ゲルニカからヒントを得たもので、サイズはゲルニカと同じ縦4メートル横7.5メートル。作品中央の世界地図の上にマザー直筆の言葉「works of love are works of peace」(愛の業は平和の業)の文字周辺に沖さんの写真20枚がモザイクのように並べられている。

【おまけのお話】

マザーがまだ元気でいらっしゃるときはいつもおみやげにチョコレートを持って行っていたという意外なお話も聞きました。チョコレートには目がなかったそ

うで、(そんなにいつもたくさん食べていたわけではないでしょうが)亡くなる少し前、体調を壊されて、柔らかいものしか食べられなくなったとき、沖さんの持って行かれたチョコレートを喜ばれたそうです。

マザー・テレサが亡くなって10年。沖さんは、がんと闘いながら「彼女の平和への思いを忘れてはならない」と、日本だけではなく世界中で写真展を開く夢を持っているそうです。

私もなんとなく過ぎていく忙しい毎日の中に、少しでもマザー・テレサや写真家沖さんの平和への思いを持ち続けていきたい、子どもに伝えていきたいと思いました。

そして、子どもが手が離れたらまたインドに行く日がくるのかなあと、帰りの電車の中でぼ~っと考えたのでした。

インドで話そう

大畑朝義 (OHATA Asayoshi)

NO.2



ノモスカール (こんにちは)

今回は、前回の“インド全州の旅”で紹介したオリヤー語です。余談ですが、私がオリッサ州のプリーに滞在していたとき、地元のバスガイド付きツアーで世界一の汽水湖であるチリカ湖に行きました。その際、そのガイドさんはオリヤー語しか話さなかったので、何も分からなかったということがありました。

「ノモスカール」はヒンディー語の挨拶「ナマスカール」がなまったものだと思います。覚えやすいですね。

形がかわいらしいオリヤー文字は、サンスクリット語やヒンディー語の表記に用いられるナーガリー文字やベンガル文字の、マートラーという文字上部の水平

線が半円形に湾曲するためにほとんどの文字が丸くなっています。

統辞は、主語 + 間接目的語 + 直接目的語 + 副詞 + 動詞が、一般的な形であり修飾語は非修飾語の前に置かれているので日本人にとってはとてもなじみやすい言語だと思えます。

今回は「ウルドゥー語」を紹介します。

(参考文献：世界ことば小事典)

## 舌で感じるインド

～日本のインドカレー屋さん編～

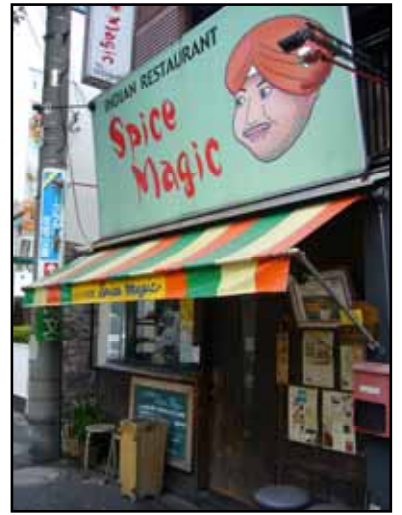
大畑朝義 (OHATA Asayoshi)

世田谷通り沿いに一際目立つ看板を掲げているインドカレー屋さんがある(右上の写真)。この目立つ看板の下に来ると、店の扉と壁は木でできていて、扉の右側にはこの店を紹介しているたくさんの雑誌の記事が貼られている。扉の左側には中のキッチンを見ることができる窓がついているので、つい立ち寄って見てしまう。すると、香りとインド人がナンを作っている手さばきにつられて店の中に入ってしまいたくなるかもしれない。店の中はカウンター席とテーブル席があり、カウンター席の目の前が厨房になっている。

さて、ここの一番の人気メニューはというと野菜と鶏肉の入ったサグチキンカレー(下の写真)である。サグとはインドで野菜を意味する言葉である。食べてみると、とても香辛料が効いているがミルクが少し入っているせいでまろやかな味で、とても食べやすかった。鶏肉も香辛料で味付けしており、少し臭いぐらいだったがこのカレーにはよく合っていた。野菜はとてもよく煮てあり、野菜は原型をとどめていなかったが、



唯一、上にトッピングされていた生姜だけは確認できた。そして、プレーナンはカウンターに座ったおかげで目の前で伸ばして焼いているところを見ることができ、ほんの数分で生地が熱々のナンになって運ばれてきた。ナンは予想よりも大きかったし、やっぱりインドカレーにはナンがよく合っていた。



インドで食べたらもっと安いのだろうけど、たまには少し奮発して日本でインドのカレーを食べるのもいいかもしれない。

「Spice Magic」

東京都世田谷区桜 3-25-3 03-5426-6955

営業時間 11:00~14:30/17:00~22:30 定休日 水曜日 サグチキンカレー 780円 プレーナン 250円

## 2006年度インド隊レポート

### インドへの青年海外協力隊の再開

大畑朝義 (OHATA Asayoshi)

去年の3月にJICAインド事務所次長の伊藤耕三さんに私たちが取材した内容を掲載します。現場で働かれている伊藤さんだからこそ話せるインドにおける国際協力の現場の内実などをお機器したのでそれをお伝えします。

日本は、インドでもっと多くの技術協力をすることができます。しかし、インド側のプライドがそこを許しません。

それでも日本には絶対に勝てるという分野があります。農業分野で言うと、インドのレベルはとても高く、日本と同レベルかそれ以上の沢山の専門家の人たちがいます。したがって、日本人が農業分野で試験場レベルの農業技術をインドで伝えようとしても、馬鹿にされてしまいます。君たちは金だけを出しておけばいいと言われるだけなのです。

日本では一般農家レベルにいくと、試験場で作ったときと農家で作ったときの収量の差は2倍程の差しか

出ませんが、インドでは、試験場での収量を 10 とすると農家では 1 程度になってしまいます。何がその差に出てくるのかというのが、この国が途上国たる所以がもしれません。

インド人のプライドを傷つけないように日本だからこれができるというところを見せていくと、インドのある層では漸く受け入れてくれるようです。

特に、環境問題という分野においては、日本は彼らがまだ経験してないことを経験し、さらにそれを克服してきているという点で彼らは認めてくれます。だからこそ、そういう分野を探して、JICA の人たちも提案しながら仕事をしているようです。

そのようにして行った実績として、技術協力経費が 2003 年に 10 億、2002 年に 9.6 億、2004 年は 10.5 億となっています。ODA 総額(2004 年当時)の 1,398.34 億と比べると、JICA の技術協力経費は約 100 分の 1 という低い数字になります。

(単位：億円)	
2004 年度	
有償資金協力	1,344.66
無償資金協力	29.89
<u>技術協力</u>	<u>23.79(9.67)</u>
ODA 計	1,398.34

注) 技術協力は日本全体の技術協力事業の実績であり、( ) 内は JICA が実施している技術協力事業の実績。(外務省 HP 参照)

研修員 4,500 人というのはいくつにも感じますが、13 億の人間に 4,500 の人間では、ほとんど 0 に等しく何をやっているのかわからないというのが正直なところかもしれません。ただ、これも大海の一滴ではあっても、こういった人たちがいるからこそ、この人たちの足場に我々は技術協力をしていくことができるようです。

さらに、専門家の派遣があります。2002 年が 24 人、2003 年が 18 人、今年 2004 年は 40 人弱でしたが、インドネシアの場合は約 5 億人の人口に対して数百人を派遣しているので、インドでは 13 億の中に 30 人では、やはり少なすぎると言えるでしょう。

また、インド政府のポリシーとして、他国に援助を頼らないということの一つの証拠に、インド政府は中央省庁に外国人専門家を認めさせないようです。

そのような中でも JICA は 2 名の専門家を中央省庁に

入れているのです。これは、インドが日本のことをそれだけ大事に思ってくれているということの証拠がもしれません。

日本は、今までコツコツと技術協力をしてきましたが、他の欧米のドナー(提供者)のように、各種の条件をつけてこなかったということもあるのかもしれませんが。例えば、セクターリフォーム(政府機構を変えること)をすれば資金援助をこれだけしてやるよというようなことを日本はしませんでした。

このように日本は内政干渉をしないということで、中央省庁は日本だったら受け入れてもよいということで現在、2 名入っているそうです。

今度、再開される青年会外協力隊もこの例に漏れません。1980 年代の頭までは各国の政府ボランティアがインドに入っていました。アメリカ、イギリス、カナダ、フランス、日本も協力隊が入っていたのです。しかし、1983 年を境にインド政府が新たなボランティアの要請を辞めました。これはちょうどその時、アメリカとインドとの政治的関係が非常に悪くなったときで、インドはアメリカの『ピースコ』を CIA の手先だと思っていたのです。

これに対してアメリカ側もインド政府に対して批判を展開しました。その結果、インド政府はボランティアをもう必要ないと判断したのですが、アメリカだけに出て行けというのは大人気ないということで、全ての外国人ボランティアは必要ないということになったとのことです。

このような流れの中でようやく日本の青年海外協力隊が入ります。インドにとっては、外国人ボランティアを締め出した後、最初の海外政府ボランティアの再開となります。

ですから、他の国は日本に何をやったらそんなことができるのかと聞くそうです。

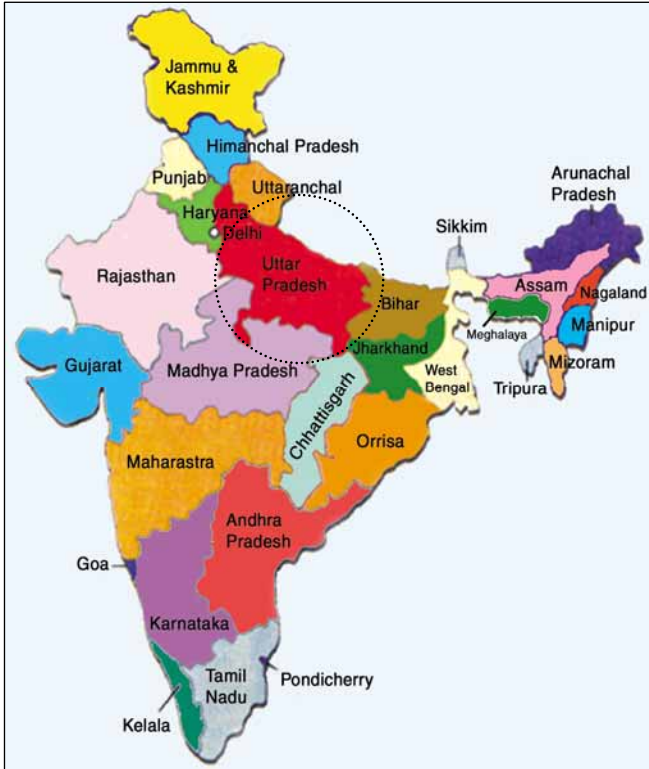
協力隊の職種は、日本側は限定していませんが、インド側はやはりプライドがあって、日本人にしかできないことをやってほしいということで日本語教師と柔道指導者の募集を始めようとしています。

このように JICA の事業規模というのは、インドの 13 億という母数から考えると、あまりにも小さく、まだまだ知名度という点では全く低い状態にはあるのですが、少しずつ両国の信頼関係の下、日本が技術を供給できるようになってきているのです。

## インド全州の旅

～ウッタール・プラディーシュ州～

佐藤 有紀 (SATO Yuki)



相ネルー、二代シャストリ、三代インディラ・ガンディーを輩出しています。

農業では州内生産に占める割合は 45%とインド平均 24.7%と比較してもかなり多く、他州と同様に農業が重要産業の一つと位置づけられていることがわかります。中でも、ジャガイモ、マンゴー、グアバはインドの 4 割弱生産されており、州の食品加工業を支えています。

タージマハルのあるアグラ、バラナシ、クシナガル（ブッタ終焉の地）どれも聞いたことのある観光地ですよね、これらも同州にあるのです。これらに代表されるように、ヒンズー教、仏教、イスラム教等宗教的な聖地や歴史的な遺跡が多数あり、デリーから程近いこともあって、インドを訪れたら必ず行きたい州の一つだと思います。

このように多くの人を惹きつけ様々な民族が往来してきた訳はガンジス河、ヤムナー河の両大河に位置し、水利に恵まれていたからです。また、州都ラクノウ、アグラはムガル帝国の都市・古都であったためイスラム文化の色彩が強く残りバラナシ、マトゥラー（デリーの南南東）はヒンズー教の聖地としてそれらを含むウッタール・プラディーシュ州は現在でも多彩な文化状況を醸し出しています。

参考文献：

ダイヤモンド社 巨大市場インドの全て

刀水書房 インド現代政治史

### 2007 年サマンバヤの会 新春特別公開企画から 大橋正明 講話録 第 3 回

サマンバヤ通信編集部

本講話録は去る 1 月 27 日（土）サマンバヤの会の新春特別企画の際、当会の副代表で恵泉女学園大学教授の大橋正明がインドの NGO 活動の現状に関して話した内容のダイジェストである。通信 79 号・80 号の掲載に引き続き残りの部分を掲載する。これはあくまで速報的、概要的役割を果たしているもので、文章に関する責任は全て編集部であり、大橋正明が責任を持って校正したものではないということを予め御了承願いたい。いずれ、大橋の目も通してサマンバヤの会のブックレットとしてまとめるつもりではあるが、今回の通信ではその概要を掲載している。今回の第 3 回で最終回となる。

今回はインドの人口と全州の中でも四番目の広さを誇るインド最大級の州、ウッタール・プラディーシュと一緒に旅しましょう！

#### 【概要】

州都：ラクノウ

人口：1 億 6,605 万 2,859 人（インド人口の 16.17%を占める）

面積：23 万 6,000 平方キロ

主要言語：ヒンディー語・ウルドゥー語

識字率：57.36% インド平均 65.38%

気候（アグラ）：MAX45、MIN4.2

雨季 6-9 月 降水量 660 ミリ

主要産業：農産物加工業（綿）、鉄道機材、電気機械類等

主要農産物：小麦、大麦、トウモロコシ、さとうきび、ジャガイモ、米、ヒヨコマメ、ヒヨコマメ

この州の特色として、政治への影響力と中心産業が農業であることが挙げられます。

地図を見てもわかるように、北インドを中心としたヒンディー語地域の中心部に位置し、独立後は特に中央政治と直結してきたといえます。その証拠に初代首

ヴィノーバーが始めた『ブーダーン運動』によって、豊かな人たちの土地を無償で寄付してもらい、貧しい人に分ける動きがインド全土におこり、得意にビハール州では全国平均より多い、全耕地面積の約 11%、が移動した。というところから今回の話は始まる。

### 【サマンバヤ・アシュラムの誕生と役割】

ブーダーン運動によって寄進された土地は本来どの部分の人たちに分け与えられなければならないかという、SC(指定カースト = 『Scheduled Caste』)やST(指定部族 = 『Scheduled Tribe』)、つまり、貧しくて土地をもっていない人たちと考えられます。

SCとSTは違いますが、重なる部分も多くあります。サマンバヤ・アシュラムがあるガヤ県はSCが多いのです。ビハール州の中でも、どのような不可触民がいるかは違いがあります

北のほうのパトナに多いのはムサハール。ガヤ県周辺に多いのはブイヤー。全国に広がっているのはチャマールの人たち。これは商売に結びついているのです。『チャマール』は皮なめしの職業(日本でも部落差別の対象にもなりました)。『ドゥサード』は警備員とか、私兵とか、比較的体の大きな人たちです。『ムサハール』は農業を好まず、狩猟・採集を主に職業にしています。ジャングルで暮らすという意味ではブイヤーと似ていますが、ブイヤーは土地を耕したりして生きています。『ドービー』は洗濯を職業にしています。『パーシー』は私が愛してやまない椰子の木からお酒をつくる人たちです。どこの場所でも必要とされるので、全国にあちこちいます。『ラジワール』はムサハールとブイヤーの間の人たちです。

ヴィノーバーはサルボータ運動を2つの意味で使いました。ひとつは、外国人のお客さんにインドの現状とその運動の内容などを世界に宣伝するためのショーケースとしたのです。宣伝の窓口としての役割を担わせました。

もうひとつは、土地をもらった貧しい農民の人たちに道路を作ったり、井戸をつくったりなどの仕事も与え、共同体として社会的にケアをするという役割を担わせました。

サマンバヤ・アシュラムは彼らの子どもたちを収容しているわけですが、学校をつくるきっかけになったのは1960年代のビハール大飢饉。このとき特に苦しん

だのがブイヤーの人たちです。ドワルコ・ジーはここで初めてブイヤーと出会ったと言っています。それまでは彼らは森のなかで生活していました。『パーシー』とか『ドゥサード』は都市に住んでいるので、情報を早く入手できますが、ブイヤーの人たちは違います。

そういう人たちにケアをしないといけないということでサマンバヤ・アシュラムが生まれたのです。

土地の分配も、チャマールやドゥサードに当てられたものに多くて、ブイヤーの人たちにはあまり行き渡っていませんでした。

### 【サマンバヤ・アシュラムの課題】

サマンバヤ・アシュラムがうまくいっていないと考えられる理由のひとつとして、そこにいる人たちがナーラーヤンが好きということにあると考えられます。ナーラーヤンは『非暴力的な闘争』という言葉を使いましたが、ヴィノーバーはこの言葉を使わない哲学的なタイプの人でした。ドワルコ・ジーはヴィノーバーの弟子で『闘争』という言葉を使いません。

しかし、ビハール州はナーラーヤンの影響が強いのです。現在、サマンバヤ・アシュラムはドワルコ・ジーの「独裁的な状況」が続いていて、他の理事の人たち(サマンバヤ・アシュラムの運営を管理する理事会)の意見をあまり聞いていません。

その結果、いまだに子供たちに教えるための教科書ができないとか、他人の意見に耳を貸さないとかの現状を抱えています。

NGOというのは、本当は民主的な組織なのですが、南アジアの場合は1人のリーダーが年をとっても、その組織引っ張ってしまうことが多く、このようなことがサマンバヤ・アシュラムの問題と限界になっていると考えられます。

このシンポジウムの第1部で東京農大の学生のみなさんが提案した教科書のこと、アシュラムで生活している、あるいは管理しているみんなで作って新しい形にすればいいと考えられますが、なかなか良い方向に向かっていないのが現状です。

以上が、インドのNGO活動の現状からサマンバヤ・アシュラムの現状までの外観です。今後の活動の参考にしてください。

## サマンバヤの会とは

当会はインド・ビハール州にあるサマンバヤ・アシュラムに対して主にアウトカーストの子どもの教育のために、里親という形で資金援助をする窓口として活動している会です。里親といっても日本へ子どもを連れてきて、養育するわけではありません。養育費を負担して、インドのサマンバヤ・アシュラムへ送金することを意味します。

1人の里親の申し出があった時点で、アシュラムでは周辺の家庭からアシュラムでの養育を望む子どもたちを受け入れます。その子どもに対して5年間、養育費を送ります。そして、その5年が過ぎ、さらに5年間を子どもはアシュラム内の農作業などをして生産の助けをしながらアシュラムで生活をします。そして、「卒業」ということとなります。養育費はアシュラムの財政の中に繰り込まれ、その中から子どもたちへの諸費用を出していくという仕組みです。

## サマンバヤ・アシュラムとは

サマンバヤ・アシュラムはガンディー翁の高弟の1人、ピノーバ翁が創設し、その弟子の1人であるドワルコ・スンドラニ氏が中心となり、その運営にあたっています。

インドには「アシュラム」という組織があります。アシュラムとはヒンディー語で直訳すると「同等の仕事」となりますが、「精神修養の場」とか、ある種のセンター的役割を担う組織を指したりします。サマンバヤとはヒンディー語で「調和」とか「融合」などを意味します。英語では「harmony」にあたります。つまり、サマンバヤ・アシュラムは「調和のための修養道場」となりますが、インドの、そして地球に住む全ての人類の調和を目指す研修施設と言えるでしょう。サマンバヤ・アシュラムでは、子どもの教育こそが未来のインドの開発のためになるという考えの上に立ち、身分制度の為に抑圧されているハリジャン（不可触民）の地位向上のために、その子弟の教育に重点を置いています。

## 入会案内

### 里親会員

サマンバヤ・アシュラムが養育する子どもの資金を援助します。  
里親会員に登録されますと、サマンバヤ・アシュラムは養育すべき子どもをサマンバヤ・アシュラムに連れてきて養育を始めます。  
5年間はその子どもの養育費を里親会員が保証することとなります。  
お支払い方法 5年一括 120,000円  
一年ごと 24,000円  
半年ごと 12,000円

いずれかの方法でお支払いください。

会費のうち、1年あたり1,4000~1,5000円（120USドル相当）をサマンバヤ・アシュラムに送金し、残りをサマンバヤの会の運営費用に充てます。サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

### 賛助会員

サマンバヤの会の活動を資金面で支え、応援していただきます。  
会費は1口5,000円/年で、サマンバヤの会の運営費用に充てます。  
サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

### 入会方法

入会のきっかけ、経緯、電話番号、さしつかえなければ職業、Miss,Mr,Mrs,Msを記入して入会申し込み書として本部宛に郵送またはFAXしてください。  
会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。  
入会の確認がされたことを通知します。  
会員証は発行していません。

### 継続の場合

会員として継続される場合  
会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。  
入会の確認がされたことを通知します。

### 退会

会を退会する場合、速やかに文章で（郵送またはFAX）お送りください。但し、里親会員で会費未納分については請求する場合があります。

**郵便振替口座 番号 00260-3-15712**

## 編集後記

サマンバヤ通信をホームページで見ることができるようになりました。PDFでダウンロードできるので、当会の活動をお知らせするときにもお使いください。  
サマンバヤ・アシュラムの卒業生が中心になってマイクロクレジットを始めます。現地で運営の仕方を検討しているので経過を見守っています。 T.F.

発行：2007/08/11（隔月第二土曜日）  
発行人：サマンバヤの会  
本部：〒299-4423 千葉県長生郡睦沢大上 3615 - 3  
TEL-FAX：0475 - 40 - 9795  
東京事務所：〒113-0033 東京都文京区本郷 5 - 1 - 16  
NP-ビル 5F 東大教育研究所内  
TEL：03-3815-3035 FAX：03-3818-1219  
印刷：株式会社ラティオインターナショナル